練馬区の将来像を考える区民懇談会
環境・まちづくり分科会
第４回　議事概要

日時：平成 19 年 11 月 21 日（水）18:30～20:30
場所：練馬区役所東庁舎６階６０３会議室

出席者【敬称略、50 音順】
浅野祐介、石田節子、上野定雄、加藤眞一、加藤龍一、要久美子、木村武、関口陽一、田中麻起子、沼田美穂、平田英二、深野一民、福澤節三、蒔田實、松島修三、柳洋子、渡邊義雄

１．中間報告に向けた検討の進め方について

－事務局より中間報告に向けた検討の進め方についての説明を行った

２．討議

（１）全体説明

－コーディネーターの原田氏より、本日のプログラムについての説明を行った。

（２）グループ別討議

－前回同様のグループに分かれ、前回議論の成果の再整理と将来像の検討を行った。

【討議結果要旨】詳細は別紙
（「練馬区の将来像を考える区民懇談会～環境・まちづくり分野　グループ検討素材第４回修正版」「練馬区の将来像を考える区民懇談会～環境・まちづくり分野　将来像の検討結果」）参照

■グループ参加者（敬称略、50 音順）
グループＡ：加藤龍一、要久美子、深野一民、福澤節三、蒔田實、渡邊義雄
グループＢ：石田節子、上野定雄、田中麻起子、平田英二、柳洋子
グループＣ：浅野祐介、加藤眞一、木村武、関口陽一、沼田美穂、松島修三

（３）全体発表と意見交換

－討議結果について発表と質疑応答を行った。

■Ｂグループ

・検討資料については多少の修正を加えた。
・「こうありたい姿」については「緑をもっと楽しむ」「土を大切にする」ということを

重視している。緑の利用については「憩いの森がもっと積極的に利用出来るようになっている」ということを考えた。また重要な概念として、「大きな樹木を増やすこと」と「草木の種の多様性を保つ・育む」といった意見が出された。公園についても、「遊具をおいた公園だけでなく、土と緑を大事にした公園を増やす」といったことが記載された。

・将来像としては、３つを提示した。多様な緑としては、公園だけではなく農地や家庭の中の緑なども含めてである。

・この３つをくくる概念として「土と水と緑を非常に大事にする地域」、すなわち「ふるさとと呼ぶにふさわしい練馬」とした。

・具体的な取り組みについては、落ち葉を堆肥にするだけでなく地域や家庭で利用できるような仕組みを作るといったアイデアが出されている。

・憩いの森は非常に大きなポイントになると思う。そこで子どもが遊んでいるとともに、ご長寿さんが一緒に楽しんでいる空間を作るといった、特徴のある「憩いの森」をつくっていくことが重要である。

■Ｃグループ

・検討資料については、「道路幅が狭いと言うことがあり、災害時に対応して、今後の改善が必要である」といった意見が追加された。また、地元で買い物をしようとしても交通が不便であるため、地元商店街が寂れるといった議論もなされた。

・こうしたことを踏まえて、地元の産業を支えるまち、地場産を活用するまちといった意見も出されたが、まだ取り組みも少なく発展させるべき特徴のある産業もないのではないかといったことから、「賑わい」という視点からの将来像は議論出来ていない。

・結果、将来像として、まず「ごみの姿が無くなるまち」を取り上げた。これは、家庭のごみを減らすことと、マナーを守るという二点から想定している。

・２点目としては「エネルギーを大切に使うまち」として、自然エネルギーを利用することや、公共交通機関を使うなど、一人ひとりがエネルギーを大切にするまちを考えている。

・３点目であるが、当初は、違法駐輪が無くなるまちを想定していたが、これでは、自転車利用を抑制するように見えるため、自転車が利用しやすいまちを目指すという観点から「誰もが移動しやすいまち」とした。これは、違法駐輪を減少させることと、高齢者が歩きやすくなること、中心部から離れたエリアからも中心部に移動出来るような公共交通機関を整備するといったことが想定されている。

■Ａグループ

・豊かな川になるためには豊かな水が必要、そのためには降った雨を土の中でどれだけ保

水出来るかが重要である。そのためには、どれだけの水を練馬区の台地にとどめられるか、そのシステム作りが必要ではないかという意見が出た。

・川は誰もが身近で遊べる空間であって欲しい。川は危険であることをこどもが体で覚えて欲しいという議論もなされた。

・練馬にとっては農業がキーワードになると思うが、だからといって、緑である農地を保全するのかは難しい課題である。「練馬型イキ生き農業」というキーワードは出されたが、具体的にどのようにするかについてはまだ十分議論できていない。その結果、将来像としては、緑と川が身近なまちを目指す、ということに絞り、農業の保全はあくまでもその具体的な取り組みとして位置づけた。

（２）全体討議

■委員

・C グループの「ごみの姿が無くなるまち」とあるが、家庭ごみの大部分は枯れ葉だったり生ごみだったりするので、「みどり文化」という中でリンクさせることはできないか。

・こうしたごみの堆肥化が土を大事にすると言うことにつながり、結果的には A グループのイキ生き農業としている地域内の循環農業につながっていくのではないか。

■委員

・草木の種の多様性を保つというご意見が B グループの中でみられたが、植生だけではなく水の生物など全ての生態系としてとらえて、環境という大きな概念にしてはどうか。

■委員

・多様な緑というのは、憩いの森や農地といった様々な種類を指すこともあるし、種の多様性も勘案した表現である。

■委員

・ごみをなくすためにはダンゴムシが大事。それも種の多様性にもつながっている。

・C グループの「エネルギーを大切にする」という内容があったが、小規模な風力発電・水力発電を取り入れることは、水と緑につながっていくだろう。

・憩いの森が配置されて緑道が整備されれば、移動しやすいという空間にもつながるのではないか。

■委員

・エネルギーというのは、自然エネルギーも全て含めて幅広い内容を想定している。

（３）中間報告に向けた準備について

－中間報告に向けた発表者として、A グループから要氏、B グループから平田氏、C グループから加藤（眞）氏を選出した。

（以上）